

ルカによる福音書5章8節 「先生から主に」

1A 「罪深い人間」

1B 自分の漁の腕

1C 一匹も捕れない漁

2C 舟が沈みそうな大漁

3C 砕かれた誇り高ぶり

2B 神との出会い

1C 「先生」から「主」へ

2C 落ち度ない人から、ひれ伏す人へ(ヨブ)

3C 怒って預言する人から、憐れんで預言する人へ(イザヤ)

4C 非の打ちどころのない人から、罪人のかしらへ(パウロ)

2A 「私から離れてください」

1B 神と人との大きな断絶

1C アダムと神との断絶

2C ヨブのうめき

3C 神殿の仕切り

2B 共におられるイエス

1C らい病人に触れる方

2C 罪を負われる方

3A 「恐れることはない、人を捕るようになる」

1B 恐れから畏敬(恵み)へ

2B 魚から人へ

本文

ルカによる福音書5章を開いてください。私たちは午後に、5章を一節ずつ読んでいきますが、今朝は5章8節に注目してください。「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」ペテロが、イエス様の言われる通り、網を降ろして舟が沈んでしまうのではないかと思われるほど大漁だったのですが、これを見たペテロが、自分は罪深いと言っている場面です。

私たちは、ここの場面を先月のカルバリーチャペル日本カンファレンスにて、初めのセッションにてメッセージを聞きましたね。イエス様がペテロを呼ばれたということ、召されたということから、私たちも神は召しておられるのだということでした。四つのポイントでリック・バーネットさんが話していました。一つは、自分の快適さを明け渡すように召されていることです。一晩中、漁をして、舟から出て網を洗っていたのに、イエス様は舟を漕ぐように言われました。御言葉を語られたら、舟

を深みに漕ぎだして、網を下ろしてみなさいと言われました。ですから、自分の快適なところ、居場所から出ていくように召しておられるということです。二つ目は、自分の先入観を捨てるように召されています。夜通し自分は漁をしたのに、網を降ろしなさいとなんで言うの？とペテロは思いました。「5:5 でも、おことばですので、網を下ろしてみましょう。」とイエス様は言われました。魚は捕れるはずがないという先入観を、主の言われることのために捨てました。三つ目は、他の人たちと共に働くということです。ペテロは、ヨハネとヤコブを呼んで、魚を二艘の舟で引き上げました。自分だけでなく、仲間がいるということです。四つ目に、主が自分の情熱を傾けているものを、イエス様に捧げるように召しておられます。人を捕る人にしようといえとイエス様が言われたように、自分が情熱を傾けているものを、主にお捧げするのです。

1A 「罪深い人間」

こうやって学びました。そして再び、同じ箇所を見ているのですが、今朝は、ペテロが、なぜ、この大漁の姿を見て、自分のことを罪深いと言ったのか？ということです。一見、つながらない言葉ですね。特に罪を犯したような形跡は見当たりませんね。魚がたくさんいて、それでなぜ、自分の罪の自覚が与えられたのでしょうか？

1B 自分の漁の腕

それは、自分の漁の腕が何でもないことに気づいたからです。

1C 一匹も捕れない漁

ペテロは、漁師の家におそらくは育っていたのだと思われます。漁師として家業を立てていました。漁に関してはプロです。そういった職人技を身に着けている人でも、全く自分では太刀打ちできないことがあります。5 節に、「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。」と言っています。網だけはしっかりよごれていますから、全く捕れなかったのに網を洗っていました。

2C 舟が沈みそうな大漁

ところが、彼にとっては、尊敬はしていますが、ユダヤ教の教師、ラビにしか過ぎないイエス様が、「網を下ろして魚を捕りなさい。」と言われるのです。そして、その通りにすると二艘の舟が沈みそうになるほど、大漁だったということです。

3C 砕かれた誇り高ぶり

そこで自分の拠り所を、彼は失ってしまいました。単にイエス様が、自分よりも漁を知っておられるということではありません。自分には、自分というものを支えになっているもの、そういった誇り、自尊心というものが誰にでもあります。ペテロはそれを、長年自分のしてきたこと、漁に置いていました。それが、今、自分の中で崩れてしまったのです。人間は、自分が何かをしているというところに、自分の居場所を見つけようとします。ところが、そこには罫があつて、自分が何かをしているということは、そこに自分というものがしっかりとあつて、それで自分というもの、プライドが保てれ

ているのです。そのプライドを聖書では、罪と呼びます。アダムが罪を犯した時に、神のように賢くなれるとエバが聞いたので、善悪の知識の木から実を取って食べたのですが、そうやって自分が人生の主になってやっていけると思ったのです。

ところが、ペテロのように、人々はどこかで行き詰まります。自分のやっていることに、どんなに進進しようにもできていない目に見えない壁を見ます。しかし、それが神のしるしなのです。私たちが自分のしていることに、何か前に進めないものがあると感じた時は、そこで、神が、「わたしが神である」という信号を、私たちに発信しているのです。

2B 神との出会い

1C 「先生」から「主」へ

ペテロは、イエス様のことを「先生」と呼んでいました。これはユダヤ教の教師、ラビであります。ラビとしてペテロは尊敬していました。「5:5 先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみましよう。」と言いました。ラビだから、ラビのことを尊重して、網を降ろしてみようと思ったのです。ところが、です。自分が仕切っていたと思っていた領域が完全に崩されて、そこが全く、イエスご自身の領域となったのです。そこで、ペテロは先生ではなく、主と呼びました。「**主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。**」ペテロは、イエス様に自分の義理のお母さんを熱病から助けてもらいました。そして、このようにイエス様の教える言葉をずっと聞いていました。ですから、ラビとしてはとても尊敬していたのです。ラビの下で弟子になろうと思っていました。しかし、ペテロの認識が一気に変わったのです。ペテロは、ずっとイエス様に接していましたが、その本性といいますか、本当の意味で会っていなかったのです。本当の意味で会ったのです。自分には何も拠り所がない、イエスが自分にとっての主、すべての方なのだ、ということです。

2C 落ち度ない人から、ひれ伏す人へ(ヨブ)

皆さんも、そのような体験をしたことがあるでしょうか？ 神に会いましたでしょうか？ ここで言っている、罪深さは、単に何か悪いことを行ったとか、そういうものではありません。人間である限り、アダムの時から受け継がれている、自己を保つもの、自分の内側に罪というものが存在します。

ヨブと言う人がいました。「1:1 この人は誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた。」とあります。ところがこのヨブに、災難が襲ってきます。財産を一気に失い、息子、娘も全て失いました。そして自分の体の皮膚も打たれました。重い皮膚病に冒されました。そして見舞いに来た友人たちと、議論を始めました。延々と続く議論です。ヨブは、友人たちに責められて、こんな災難にあうのなら、何か悪いことをしているはずだ、としたのですが、そんなことは全く思い当たらなかったのです。正しさを主張したのです。

ところが、嵐の中から神が現れました。そして、血の基はどのようにしてつくられたのか、天の万

象は？動物は？それについてヨブは神の前でひれ伏してこう言うのです。「42:1-6 ヨブは【主】に答えた。あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました。あなたは言われます。「知識もなしに摂理をおおい隠す者はだれか」と。確かに私は、自分の理解できないことを告げてしまいました。自分では知り得ない、あまりにも不思議なことを。あなたは言われます。「さあ、聞け。わたしが語る。わたしがあなたに尋ねる。わたしに示せ」と。私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。」神にはすべてのことができ、どのような計画も不可能ではない。そして、これまで神を耳で聞いてきたが、今、自分の目であなたを見ています、と言っています。神について聞いているのと、見ているのでは全く違います。ヨブの中にも、このプライドがあったのです。それを悔いて、自分を蔑んでいると言っているのです。

3C 怒って預言する人から、憐れんで預言する人へ(イザヤ)

イザヤもそうですね。彼はエルサレムで起こっている不正を見て憤っていました。怒りながら、神の言葉を語っていました。けれども彼も見ました、天を見て、主の着座されているところを。それで彼はこう叫びました。「イザ 6:5 ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の【主】である王をこの目で見たのだから。」自分自身がその民と共に汚れている者、また怒りによって預言している自分の唇も汚れていたと告白します。

4C 非の打ちどころのない人から、罪人のかしらへ(パウロ)

そして新約聖書では、パウロです。彼は、律法においては非難されるところのない者だとまで言いました。それは奢っているのではなく、事実、それが彼の生きざまなのです。「ピリ 3:6 律法による義については非難されるところがない者でした。」ところが、彼がダマスコへの途上で、甦られたイエスに出会い、倒れてしまい、目が見えなくなりました。けれども弟子アナニアが主に言われて、パウロにバプテスマを授けました。すると目の鱗が取れたのです。そして、パウロは自分のことをこう言ったのです。「I テモ 1:15 私はその罪人のかしらです。」

パウロは、非の打ちどころがないほど努力していました。ところが、そういった人ほど、大きな過ちに陥りやすいです。彼は、厳格に律法を守ろうとしたために、キリスト者の存在を許せなかったのです。それで片っ端から捕縛しました。暴力をふるいました。そう、ユダヤ教のテロリストになっていたのです。しかし、イエス様に出会ってから、自分がしていることがこの方を迫害していることだと気づいたのです。

このように、それぞれが自分の内にある誇りが取られる時に、神とキリストに会っています。

2A 「私から離れてください」

そして、ペテロは言いました。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」なぜ、彼は自分から離れてくださいと言ったのでしょうか？罪深さに気づいて、それからイエス様に離れ

たいと言ったのか？であります。

1B 神と人との大きな断絶

単なる先生ではなく、主と気づいたペテロは、あまりにも恐れ多くなったので、近づかないでくださいと言ったのかもしれませんが。理由は再び、「**罪深い人間ですから**」ということであります。

1C アダムと神との断絶

イザヤ書には、「59:2 むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」神が私たちを引き離したのではなく、私たちが罪を持っていて、その罪が自分たちと神を引き離しているのです。その始まりは再び、アダムが罪を犯した時でした。ですので、その子孫もである私たちにも受け継がれているのです。

2C ヨブのうめき

正しい人、ヨブもうめきました。自分が落ち度なく、正しいことをしてきたはずなのに、このような災難に遭っています。それでこう叫んだのです。「ヨブ 9:32-33 神は、私のように人間ではありません。その方に、私が応じることができるでしょうか。「さあ、さばきの座に一緒に行きましょう」と。私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。」神にいくら訴えようと、圧倒的な差がある中で、その間に立ってくれる仲裁者がいてほしいが、今、ありませんと言いました。

私たちも時に感じるのではないのでしょうか？今の自分の置かれているのが、とても弱い立場です。けれども、状況は圧倒されるもので、自分にはどうしようもありません。「なぜですか？主よ？」と叫んでも、空を打つような気分になるでしょう。あまりにも全能者である神と自分とはかけはなれています。けれども、人となられたイエス様がその架け橋になられました。神であられ、かつ人であられたので、仲介者になることができたのです。

3C 神殿の仕切り

その仕切りは、天国にあるものの模型と言われる幕屋にもありました。幕屋は、何重もの仕切りの幕がありました。外庭の掛け幕、入口の幕、そして中に入って、聖所の入口の幕、それからさらに入ると、聖所と至聖所の間を仕切る垂れ幕があったのです。その垂れ幕が、イエス様が十字架に付けられていた時に、上から下に真っ二つに裂けたのです。ですから、今は、イエス様によって神に大胆に近づけますが、自分の圧倒的な罪深さからイエス様には離れていただかなければと思ったのです。

2B 共におられるイエス

ところがイエス様は、共におられました。主は、罪深いと悟った者たちに対しても、共にいてくださる方なのです。

1C らい病人に触れる方

次の話に出て来ますが、ツアラアト、らい病人がイエス様のところに近づきました。「5:12 主よ。お心ひとつで、私を清くすることができます。」当時、らい病は律法で汚れたものとされ、近づいてはいけませんでした。ところが、「5:13 イエスは手を伸ばして彼にさわり」とあるのです！イエス様は、引き離される方ではなく、むしろその汚れと罪を持ったまま、触れてくださる方なのです。

2C 罪を負われる方

主はそのような方でした。痛みに触れられ、ご自身がその傷を負ってくださいました。罪咎も、その他の負い目もすべてご自身が負われました。ゆえに、聖なる方が、私たちのそばにすることがおできになるのです。「イザ 53:4-5 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」

3A 「恐れることはない、人を捕るようになる」

そして最後に、10 節の言葉も見てください。「イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。」

1B 恐れから畏敬(恵み)へ

恐れなくてよい、ということです。人々は恐れに脅かされています。自分がこんなことをしたら、拒まれるのではないか？という恐れもあるでしょう。そして、自分がこんなことをしたら、いつか罰があるかもしれないという恐れもあるでしょう。主は、そういった恐れに奴隷から私たちを、キリストの死によって解放して下さったとあります。

しかし、畏れます。今、原稿では漢字を変えました。初めは怯えているという意味の恐れです。神は愛であり、恐れは完全な愛にはありません。しかし、神の恵みによって救われ、恵みによって立っています。ですから、神の恵みはあまりにも圧倒的なものなので、かえって畏怖の念を抱かせるものです。こんなに大いなる名誉を受けていいのか？ペテロの場合は、教会の指導者になります。人々を導きます。けれども、自分は全く罪深い者なのです。それなのに立たされている、という畏怖があります。

2B 魚から人へ

だって、それは魚ではなく、人を捕る漁師なのです。人の魂を主のところ連れて行く大きな務めがあります。自分が恵みを受けただけでなく、今度は、自分が恵みを分かち合います。祭司のよに神の前に出て、人々にその恵みを分かち合うのです。

皆さんにとって、イエスは誰でしょうか？ 尊敬すべき先生ですか、それとも主ご自身ですか？